



	INF	REF	こども	電話	メール	中央計	行徳	BM	南行	信篤	平田	駅南	全館計
3月	637	465	445	53	2	1,602	788	41	178	243	125	491	3,468
累計	8,252	5,551	5,342	670	66	19,881	10,908	631	2,005	2,344	1,490	5,534	42,793

INF:インフォメーション・カウンタ REF:レファレンス・カウンタ BM:自動車図書館

🔍 今月のレファレンス記録票から

分類

質問と内容

I/E5 60 年くらい前の市川警察署の住所が知りたい。

『市川市商工名鑑（1958 年版）』（市川市役所商工課 昭和 33 年）の p.198、『市川市商工名鑑（1963 年版）』（市川市役所商工課 昭和 38 年）p.208 に記載あり。千葉県市川警察署：市川町 5-545。現在この住居表示は市川 2 丁目 33-2 で、市川公民館となっている。

384.3 西洋における鍛冶についての資料を探している。とりわけ刀剣や槍など武器製造に携わっていた武器職人について知りたい。

『西洋職人図集 17 世紀オランダの日常生活』（ヤン・ライケン／[著] 小林頼子／訳著 池田みゆき／訳 八坂書房 2001）に p.70「鍛冶屋」p.78「刀鍛冶」p.80「鉄砲鍛冶」にそれぞれの図版と解説あり。『西洋職人づくし』（ハンス・ザックス／詩 ヨースト・アマン／版 岩崎美術社 1983）に「63.刀鍛冶」「66.鉄砲鍛冶」の図版あり。

その他『戦場の中世史 中世ヨーロッパの戦争観』（アルド・A.セッティア／[著] 白幡俊輔／訳 八坂書房 2019）p.136-150「3 脅威の職人—軍事技師たち」の項に紀元前四世紀のギリシャから中世の頃までの軍事技術や職人、鍛冶屋、木工職人といった技術者について記述されている。

724 絵具は誰が作り始めたのか。

現在一般的に使われているチューブ入り絵具は、『色彩 色材の文化史』（フランソワ・ドラマル／ほか著 創元社 2007）p.119 に「1841 年、アメリカ人の画家 J・ゴフ・ランドは、豚の膀胱よりも手軽に調製済の絵具を保存する方法として、錫の薄片でできたチューブの特許をロンドンで取得した。翌年、イギリスのウィンザー&ニュートン社がこの特許に変更を加え、ふたの部分を改良したうえで、チューブ入り絵具を売り出した。チューブの中身である絵具も発展を遂げた」と記載あり。

また、『平凡社大百科事典 2』（平凡社 1984）p.622「絵具」の項に「人類最古の絵具には消炭や水で練った泥土が用いられた。これらには固着力が乏しく、こすれば消える。絵具の歴史は顔料の接着剤（展色剤）の歴史であり、その接着剤のさまざまな性質が多様な美の表現を生んだといえる」と記載あり。

914.6 宮本輝の『流転の海』シリーズ以外の自伝的な随筆・エッセイなどについて知りたい。

小説以外のエッセイ・対談などでも、自身の生い立ち当について触れていることは多いようだが、その中で『流転の海』シリーズに関連した書として、『もうひとつの「流転の海」』（宮本

裏面に続く

輝／著 堀井憲一郎／編 新潮文庫 2021)がある。これはライターである堀井憲一郎が、宮本輝の全短編、全エッセイから、『流転の海』と「同じ世界観」と感じた小説・エッセイを集めたアンソロジーである。

また、あとがきの解説の中で、本書に収録できなかった小説やエッセイが紹介されており、その作品と著者との関連が簡単に紹介されている。いくつか挙げるとエッセイの『二十歳(はたち)の火影』(宮本輝／著 講談社 2005)や『命の器』(宮本 輝／著 講談社 2005)、『本をつんだ小舟』(宮本輝／著 文芸春秋 1993)などに著者の幼いときのエピソードなどが描かれている。

他にもこんな質問ありました (クイック・レファレンスから)

分類	質問	⇒ 回答、補足事項、蘊蓄など
I/V1	メディアパークにある大須賀力の“ママ…ご本をよんで”の像の設置について⇒「広報いちかわ」平成10年5月9日号に「この作品は、生涯学習センターに度々訪れている大須賀氏が、図書館やこども館を利用している“親子のふれあい”を作品としたものです」との記事あり。記事は、原紙を製本した『広報いちかわ 平成10年度版』または中央図書館にあるデータベース端末で閲覧できる。	
289.3	フランス領ギアナに収容されていた「ギョウム・セズネック(1878～1954)」という人物の名前や詳細が記載されている資料⇒『未解決事件の謎と暗号 歴史の闇に消えた…』(歴史の謎研究会／編 青春出版社 2007) p.119-126に1923年の事件発生から2006年にフランスの破棄院が最新を棄却するまでの経緯が掲載されている。『フランスの刑事司法』(白取祐司／著 ニホン評論社 2011) p.334-337 事件を受けて成立した再審改正法(セズネック法)について記載あり。2冊とも市川に所蔵はなく、県内にあることを紹介。なお、この回答は国会のレファレンス協同データベースを活用した。	
385	祝年(還暦や喜寿、米寿など)や厄年について、成り立ちや現在までの変遷が書かれた本が読みたい⇒『日本のしきたりがわかる本 季節の節目を祝う料理レシピ、お参り・冠婚葬祭の作法など見てすぐ実践できる!』(新谷尚紀／監修 主婦と生活社／編 主婦と生活社 2008)『和のしきたり 日本の暦と年中行事』(新谷尚紀／監修 日本文芸社 2007)、『生死(いきしに) 看取りと臨終の民俗/ゆらぐ伝統的生命観』(板橋春夫／著 社会評論社 2010)、『長寿 団子・赤飯・長寿銭/あやかりの習俗』(板橋春夫／著 社会評論社 2009)を紹介。	
494.8	以前見た、著者が実際に虫に刺された実験の様子が写真で載っている本を探している⇒『虫と皮膚炎 Dr.夏秋の臨床図鑑 Dr.Natsuaki's Clinical Photo Album Insects and Dermatitis』(夏秋優／著 Gakken 2023)	
596.6	渋柿の渋の抜き方について書いてある本⇒『柿のお菓子づくり 丸ごとコンポートからタルト、パウンドケーキ、ミルフィーユ、トロペジェンヌ、蒸しケーキ、羊羹まで』(今井ようこ／著 藤沢かえで／著 誠文堂新光社 2022)、『柿』(今井敬潤／著 法政大学出版局 2021)、『柿づくし 柿渋、干し柿、柿酢、柿ジャム、紅葉保存』(浜崎貞弘／著 農山漁村文化協会 2016)を紹介。	
E	昔読んだ絵本を探している。丁髷を結った主人公が自分を叩くと鼻が伸びたり縮んだりする不思議な太鼓を持っており、ある日雲の上まで伸びてしまい、家を建てているカミナリ様に鼻が固定されてしまったため、鼻を縮めると雲の上まで行ってしまった、という内容⇒『ふしぎなたいこ にはんむかしばなし』(石井桃子／ぶん 清水崑／え 改版 岩波書店 1975)と『てんぐだいこ』(神沢利子／文 赤羽末吉／絵 偕成社 1982)を紹介。	
P	以前見た紙芝居のタイトルが知りたい。桜のはなびらが川などにながれていくさびしいお話で、主人公は花びらで地味な絵だった。最初は花が咲いていて、途中川に流れていき、魚などにつつかれる。最後はいい人生だったというような内容⇒『花びらのたび』(浜田広介／作 長崎源之助／脚色 岩本康之亮／画 教育画劇 1975)満開の桜のはなびらが散って、その花びらが旅をし、川に流されていくお話。	